

# 大いなる目標をめざして

## — 第二次パプアニューギニア洞窟偵察 —

1983年

成瀬 暁一

### 《はじめに》

遠い昔、人間は自分達を守る所として洞窟を利用した。石器時代の人々にとっては、洞窟は天然の家そのものであった。次第に文化のレベルが上がるにつれ、岩山の冷気を受けることのない居心地の良い家をつくるようになった。こうして人は段々と洞窟から離れていくようになった。時は再びめぐって、人は今また洞窟に興味を取り戻すようになった。けれどもその理由は昔とは全く違う。現代文明は人間の社会を経済的に多くの点で変えてしまった。その少なからざる部分が、昔からの因習や慣習から解放され、自由な時間を持てるようになったことである。レジャーの時間を持てるようになり、世界各地へまだ見ぬ土地を求めて出かけていくようになった。洞窟もその一つである。

ケイビングの魅力は未知の地底へのチャレンジとか洞窟の美しさ、また新洞窟を発見する感激とかいったものである。もちろんあまり嬉しくないこともある。四六時中闇に包まれ、水浸しになったり、寒く泥まみれになるような所は全く厄介な探検でしかない。しかし、このような不快さも時には全く気にならない。本当はこのような厄介な洞窟ほど大きな感激を味わえることが多い。

「洞窟の世界」より

### 《出発に向けて》

1981年春、それは千里洞での総合調査、白蓮洞での日本最深記録樹立等、一連の青海マイコミ平での活動以来、6年ぶりのケービング活動の復活である。今後の目標も持たず、ただ漠然と、「洞窟に潜ってみたい」との憧れを持っているだけのメンバーで活動が始まった。幸いにして我々には、OBが残してくれた豊富な資料と装備があった。これを利用して六甲でのラダートレーニングを重ね、熊石洞をはじめ夏には深さ165メートル、日本第7位の龍王洞を克服し、ラダー技術への自信を深めた。ともあれケービング活動が軌道に乗ったことで、我々は今後の目標を定めるべく資料収集にかかった。メンバーは世界地図を広げ、地域を割り振り、大学教授・各大学図書館等から、各地の地質を調べ石灰岩のある地域を絞りこんでいった。結果、オーストラリア、東南アジア、パプア・ニューギニア、ジャマイカ、中国等の候補地をあげ、政治・経済状態や地質等の条件より、可能性の残されているパプア・ニューギニアを我々の目標としたのである。そこは奇しくも、我部創立当初の海外遠征計画の地でもあった。

パプア・ニューギニアでの新洞発見、世界最深記録樹立と目標<sup>ゆめ</sup>を定めた我々は、オーストラリア、アメリカ等の各大学、現地に詳しい人から、あり

とあらゆる情報の収集と平行して、国内では洞川洞窟群調査・波照間島洞窟調査と、総合的な調査トレーニングを積んだ。

さて、ケービングで最も問題となるのは、装備の軽量化である。ラダーに変わる軽量の登攀器が必要不可欠となった。そして、'82年5月、日本ケービング協会主催のケービング大会参加により、初めてシングルロープテクニックに接したのである。以後六甲での練習を積み、夏のケービング大会参加、氷渡洞、沢穴、熊石洞でのトレーニングを重ね、当初の問題を克服するに至った。

また1982年夏、パプア・ニューギニア洞窟偵察によって、現地の州知事や関係諸機関からの情報、ATEA・MAMOでのオーストラリア隊

の調査に接することで、新たにパプア・ニューギニアでの新洞発見に意欲を燃やした。そして、1984年夏の遠征に向けて、1983年春、対象となりうる地域・洞窟の選択と情報収集、選択地域までのルートの確立や渉外を目的に、再び洞窟偵察合宿を計画、2月27日人類最後の楽園パプア・ニューギニアに向け大阪を飛び立った。

# 《 隊員構成 》

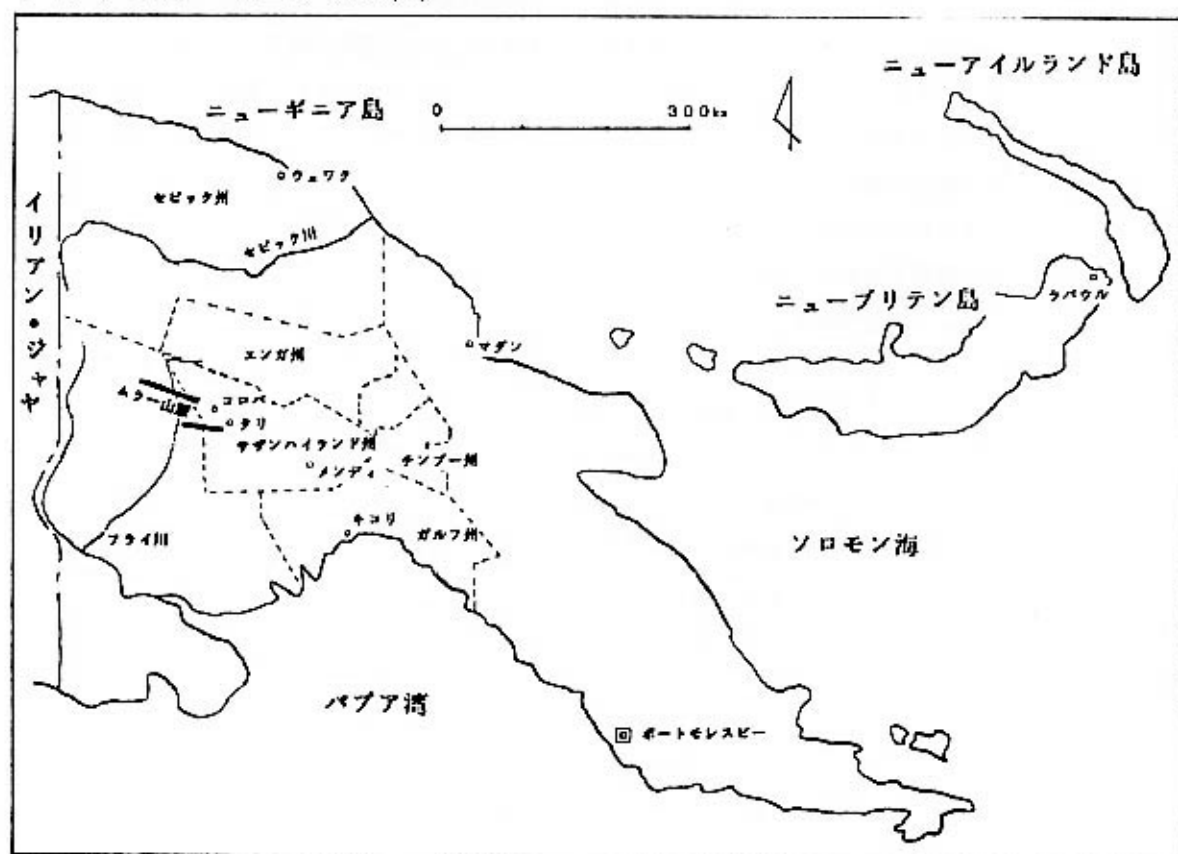
隊長・記録・渉外・通信・会計

日原 肇 25代

装備・撮影・食糧・医療

成瀬 暁一 25代

## パプアニューギニア概念図



## 《地域概要》

パプア・ニューギニアは、南半球の赤道直下0度から南緯12度、東経141度から160度にかけて位置し、ニューギニア本島の東半分、および、周辺の島々から成っている。面積は日本の約1.25倍、人口は300万人程度だが、500以上の部族が700以上の言語を使用し、公用語は英語であるが、ピジン・イングリッシュが広く使われている。

パプア・ニューギニアは、18の州に分かれており、我々が偵察するサザンハイランド州は、標高1500メートル以上の高地であり、熱帯雨林気候でありながら、朝夕は冷え込む。

人々は、サツマイモを中心とする焼畑農業を営み、自給自足を主として生活している。

## 《地質・洞窟概要》

パプア・ニューギニアには、ガルフ州からチンブー・エンガ州などを通りセピック州に至る、太古の生物の集積された石灰岩地帯が、高い山脈を形成している。サザンハイランド州にも広く石灰岩が分布し、ムラー山脈やカリウス山脈など石灰岩層が1500m～2500mとパプア・ニューギニア屈指のカルストを形成している。過去、この地域では、オーストラリア隊がATEA・MAMO地帯を中心に調査し、1978年には、ATEAで3.05kmの洞穴を、1982年には、MAMOで全長5.2km、深さ520mのパプア・ニューギニア最大、世界第12位の洞穴を発見、調査している。

熱帯のカルスト地帯では壮大なスケールの洞窟が発達しやすく、これがパプア・ニューギニアを世界中のケーバー達が虎視眈眈と狙っている大きな理由であり、ケーバーにとって世界中で一番エキサイトする地である。

## 《行動開始》

2月28日早朝、機上から見たパプア・ニューギニアは、緑々としたジャングルと黄褐色の大河だけで、改めて秘境の国へ来た実感をかみしめ、その広大なジャングルに驚嘆し、闘志が湧いてくるのを覚える。

首都、ポートモレスビーは、太陽がサンサンと照りつけ、気温30度以上、真冬の日本から来た我々にとって、この暑さに体を慣らすことが先決と思われたが、そんなのんびりとはしてはいられない。見知らぬ国で片言の英語しか話せない我々には、消化しなければならない事が山積みされている。非常に慌々しく、非常に長い1日を終えて宿に落ちつく頃には、太陽も没しようとしていた。

この国、この町に来てみて大変興味深く、また不思議に思ったことには、その町があまりにも近代化されている事、反面そこに暮らしている人々が未だ非近代的な生活をしていることである。町には日本車が溢れ、ショッピングセンターには、ありとあらゆる食料品、電化製品、衣類があり、まるで日本にいるような錯覚に陥る。物価は日本並に高く、そこは先進国の都市であるかのごとくだが、人々の生活や身につけている物は、さほど裕福には見えない。町と住民とのギャップは、我々日本人には理解できないのではないだろうか。

3月2日午前7時40分、たった10人乗りの小さな飛行機に乗り込みメンディへ向かった。約3時間飛行機の醍醐味を存分に楽しみメンディへ着陸。

メンディは、サザンハイランド州の州都である。整然とした家並で道路は舗装されており、近代化の波はこのジャングルの奥地にまで入って来ている。人々は、着飾った身なりの人もおれば、腰みのをつけただけの人もいる。また定職を持たない人も多らしく、昼間でも町に人が溢れ一日をの

んびり過ごしている。この人々は、おそらく自給自足の生活を営み、我々の様により良い生活は望んでいないのであろう。

外国の見知らぬ町において、旧友であったかのような人に出会うのは、大変うれしく、頼もしいものである。メンディでは1982年夏の偵察の折にお世話になった、ジョージ・タゴバ氏が、空港で我々を迎えてくれた。彼の協力のもとメンディでの活動がスムーズに消化でき、また彼の生家へ案内してもらい、初めて草ぶきの家をまのあたりにし、そこに暮らす人々と一夜をすごすことで、改めてニューギニアンの親切さ、生活等に触れることができた。

3月4日8時、コロバへ向けて出発すべくガバメントハウスに行くが、約束の時間に出発する様子は全くなく、3時間程して漸く車に乗り込んだもののメンディの町中を走り回るだけであった。再び車を乗り換えてコロバへ向けて出発することができたのは、12時30分のことであった。道路は舗装されておらず、アップダウンの激しい道が延々と続く。車中では、人々が楽しそうに歌など口ずさみ、今どこを走っているのか、何時なのか、何時に着くのか、といったことはおかまいなしである。このあたりは、日本人の性格とは全く違い大変のどかであり、日本人の性急な性格が可哀相にも思えてくる。この様な調子でコロバに着いたのは、太陽も没しようとする午後6時過ぎであった。

翌朝9時、慌ただしく2週間分の食糧を買出し、荷物と共にトラックの荷台に積まれ、ニューギニア、サザンハイランド州の小さな田舎町、ガバメントハウスのある最終地点コロバを後にしてケラボに向った。これから先、文明と名の付くものはひとつもないであろう。道といえば、四輪駆動がやっと通れる程の起伏の激しい岩だらけの道であ

る。トラックの荷台の我々の尻の下には当然クッションなど無く、乗っているのが苦痛である。目の前を村とは名ばかりの集落が、忘れた頃に過ぎていく。

トラックの荷台では、現地人らがビジン語で、なにやら楽しそうに騒いでいるが、我々には理解できず、2人共ただ早くケラボに着かないものかと願うだけである。2時間程走っただろうか、突然眼前に100人以上の人々が集まっているのが眼に入り、あっという間に、トラックも人々にとり囲まれる。裸に腰みのだけの人、破れの目立つボロボロの服をきた人、ギターを持っている人等様々である。我々は荷台からシャッターを押すだけだ。どうやらこのあたり一帯のフェスティバルらしく、トラックもこの広場に止まり、昼食をとるらしい。広場の中央には、アッセンブリホールが建っていて、建物の中は立錐の余地もないほど人々で埋まっている。ステージでは表彰式が行なわれている。我々も広場の中を歩き回り、異様な姿の人々にカメラを向けると、一斉に人々が集まって来る。また、我々の後ろを子供達がもの珍しそうについてくる。この人々は我々のことを、何処の国から来たと思っているのだろうか、「JAPAN」という国を知っているのだろうか。

15時過ぎ、82年夏の偵察の折ガイドだったジョージと出会い、やっとケラボに向け出発、半時間程でケラボに到着、ケラボは我々の想像以上に原始的な村で、草ぶきの粗末な家が数戸並んでいるだけで、とても村と呼べるものでない。家の中は、うす暗く、床は無く、土間の中央で火をたくようになっている。その夜は、我々の歓迎のため、鶏やパンブキン、コーン等のさきやかな御馳走をいただき、明日からの活動に不安と期待を抱きつつ眠りについた。



翌朝、目を覚ますと我々の前途を暗示するかのように小雨が降っている。この地域の天候は、一日じゅう小雨が降る日が多いらしい。10時過ぎバックキングを終え、いよいよ洞窟を発見（＝確認）すべくガイドと共に出発。

ガイドは、ジョージとギレラ、ハルバの3人、英語を話せるのはジョージだけである。彼らは、我々の目的地を庭のように知っており、洞窟も数多くあるという。バプア・ニューギニアのうっそうとしたジャングルで、洞窟を発見することにより一抹の不安を抱いていた我々にとり、彼らは頼もしい助人もある。ともあれ、ガイド達は洞窟が多く存在するというハナイに向け歩き出した。ブッシュの中は、熱帯雨林と呼ばれるにふさわしく、迷い込めば出られないと思われる密林である。道は踝まで泥に足が沈み、所々に大木が倒れている。3時間程歩いた所で遂に2人共疲れはてガイドにアタックザックを持ってもらう。彼らの体格は素晴らしく、ザックを軽々と持ち上げ驚異的な速さで歩き、空荷でも彼らについて行けないほどで、どうして芋ばかり食べて、こんな立派な体になるのか不思議なくらいだ。

3月9日、ケラボを出発して4日目、途中7個の洞窟を確認し、ハナイに到着した。ハナイは標高2600m、東西3km南北4kmの草原地帯であり、ガイドらによると、以前ハナイにはエノレイクという湖があり、大河ハナイリバーが流れ込んでいたが、1975年から76年の乾期に湖が無くなったという。

ハナイでは毎日ジョージとハルバと共に、既に彼らが知っている洞窟を確認して歩き、ギレラがまわりのブッシュの中で洞窟を探すといった日が過ぎる。彼らは我々の活動に対し非常に積極的、かつ協力的であり、我々の偵察が成功したのは、彼らのおかげでもある。天気は非常に変わり易く朝快晴であっても昼にはスコールが降りだし、夜はしとしと小雨が降る日が続く。しかし、ハナイにおいて、最も我々を精神的に苦しめたのは、この天候ではなく、蚤と、芋ばかりの食事であった。ハナイでは、キャベツとジャガイモが獲れるため、ある程度我慢出来たが、やはり我々にとっては苦痛であった。



Highland man with umak

# 《偵察洞窟概要》

—ケラボ〜ハナイ—

ケラボからハナイへのブッシュの中で7個の洞窟を確認。

=LUS MERY CAVE=

ケラボから2時間程の距離、最初に確認した洞窟、洞口は10×3mとさほど大きくなく、水が流れ込んでおり、推定深さは40m程と思われる。

=MGE・OGOBI CAVE=

LUS MERE CAVEから1時間程、洞口は2×2mと10×2mの2つの洞口が見られ、中で合流している。洞口から垂直に落ちこみ底は見えない。水流は無く、深さは90m程と思われる。

る。雰囲気は青海千里洞に似ている。

=YALU I CAVE=

YALU山の麓に開口、絶壁になっており洞口に近づけない。推定深さ約40m、MGE・OGOBI CAVEの方が深いと思われる。

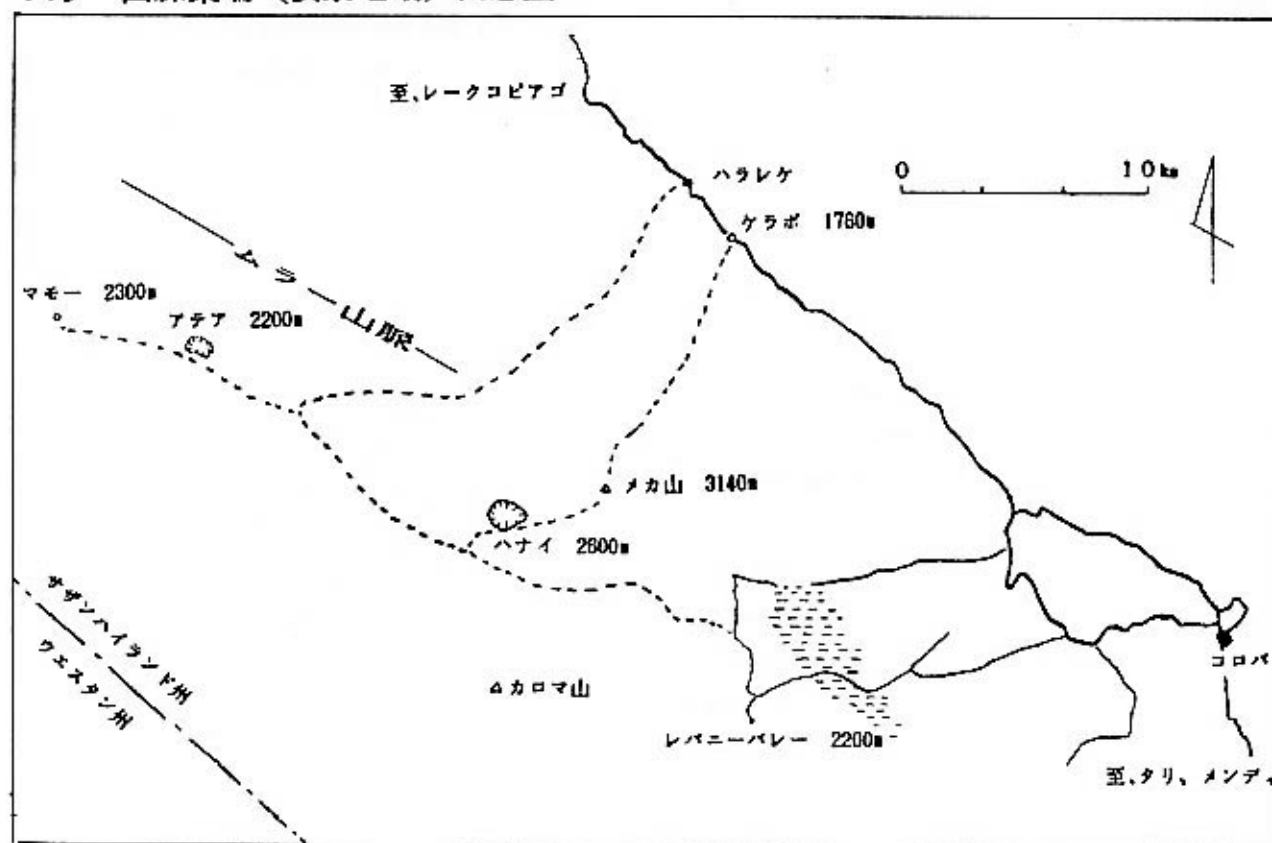
=YALU II CAVE=

洞口は10×15mの楕円形で地盤がもろく近づけない。水流は無く40m程の深さであろう。

=TRUKU CAVE=

MEKA山頂から2時間程ケラボ側へ下った地点に開口、洞口は50×30mと大きい、ブッシュが生茂り洞内は見えない。木切れを落とすと4〜5秒後に地面にあたり、さらに4〜5秒ころ

## ムラー山脈東端（偵察地域）概念図





がるため、推定70m程の深さと思われる。水流は無く、将来期待できる洞窟の一つである。

=MEKA CAVE=

今回の偵察で最も大きいと思われる洞窟である。

MEKA山頂付近に開口、ブッシュのため洞口の形は明確ではないが50×50m程の大きさはあろう。水流は無く、深さは150m程と思われ、また、MEKA山の標高が3000mあり、ケラボとの標高差から1200mの深さが期待できる。

=LABIA CAVE=

MEKA山からハナイ側へ1時間程下ったブッシュの中に開口、水流が流れ込んでおり、40m程の深さであろう。

—ハナイ—

=HENEROWA I CAVE=

唯一の横穴。かつての湖の底にある。洞口は、5×5mで洞口付近にのみ鍾乳石とリムプールが見られるが、洞内はじわりと石だけである。全長は700～800m。

=POKE I・II CAVE=

ハナイブッシュの中に開口。

=TELE TELE I CAVE=

両方ががけになっているほそ長い洞窟、がけの隙間からホールが見える。深さはさほどないが、かなり広いホールがあると思える。

=TELE TELE II CAVE=

すり鉢のような吸い込み口の真中に穴がある。以前現地人が洞内に入ったことがある。彼の話によると、中は背が立つほどの高さで、MAMO並に広く四方八方に道があったそう。おそらく、TELE TELE I CAVEとつながっているだろう。

=AWINDA I CAVE=

水汲み場の近くに開口、2×1mの洞口、小さな洞窟、中には水が溜っている。

=AWINDA II CAVE=

=HANAI I CAVE=

ゴーと水の流れる音が聞こえる。

=HANAI II CAVE=

洞口は60×10mと最も大きく、MAMO並だという。中に降りてみると水がゆるやかに流れこんでおり、洞内には水が溜っている。乾期には水がひくという。

=HENEROWA II CAVE=

ハナイ最大の堅穴、ブッシュの中に開口、かつてHENEROWA川が流れ込んでいたそうだが今は涸れている。木片を落とすと、10秒間程こがるためかなり深いと思われる。

=HEE I CAVE=

ブッシュの中に開口、洞口は狭く小さい。入口付近には鍾乳石が見られ、10m程垂直に落ち横穴に続いている模様。

=HEE II CAVE=

洞口はHEE I CAVEより大きく、深さは40m程でホールがあると思われる。

=EKOBIA I CAVE=

=EKOBIA II CAVE=

堅穴だが入口が狭いためチムニーでかなり降りることができる。最深部は狭く人間は通れない。

—考察—

HENEROWA I CAVEの他は全て堅穴であった。ハナイガーデンの洞窟は地下でつながり、ハナイの地下を横穴が縦横に走っているのではないだろうか。またハナイからケラボには多数の洞窟が存在するが、ハナイからレバニバレーには全く洞窟が存在しないため、ハナイの川が伏流しケラボに流れている可能性は高い。ハナイ周辺とケラボをつなぐ洞窟が存在すれば、深さ1200mの洞窟が眠っていると考えられる。

### 《ブッシュとの別れ》

3月16日、ハナイでの7日間の活動を終え、午前7時30分コロバへ向けハナイを出発。合計21個の洞窟を確認でき、無事責任を果たせたことで安堵感を覚える。道は行き以上にひどく、時には膝まで泥の中に足が沈む。17日昼過ぎ久々に村が在るレバニバレーに着いた。レバニには学校もあり、多くの人々が暮らしているが、文明化の波はここには及ばず、未だ粗末な家で生活している。翌朝夢にまで見た町コロバへ向け歩きだす。コロバに着けば、重いザックを持つこともなく、またシャワーとベッドと食べ物に有付くことができるのだ。しかし、密林に覆われたこの山中からは、コロバの町並は、見ることはできない。ただひたすら歩くのみである。2人共疲れ果てて漸くコロバに仙り着いたのは、陽も落ちようとする夕暮れ時であった。

こうして長く辛かったブッシュと別れたのは、3月18日のことであった。しかし、それはまた我々のパプア・ニューギニアにおける、洞窟探検に退却を許さぬ日となったのである。

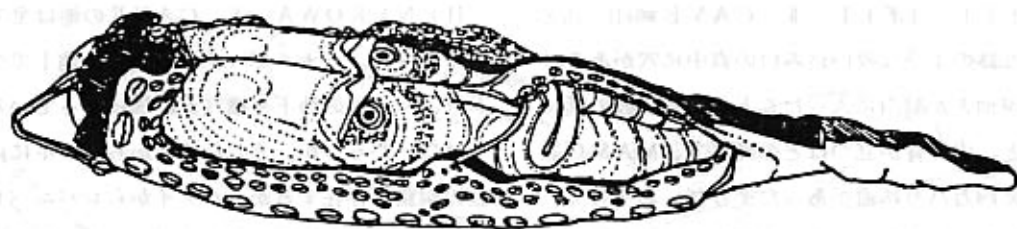
### 《おわりに》

3月21日ガイドとも別れ、トラックの荷台で揺られてメンディへ、空路ポートモレスビーに着き、今回の偵察の全ての行程を終了し、30日香港を経由して無事帰国した。

約1カ月もの間、見知らぬ異国において、洞窟を発見・確認できたのも、親切で人なつっこい、ニューギニア人と、心配して下さった日本人の協力があったからこそである。

ニューギニアの大地には、どこか洞窟が口を開け、我々を待ち構えている。これらの大洞窟を調査為尽くすには、今後、さらに技術の向上を目指すと共に、総合的な調査トレーニングを積まなければならぬ。また、幾度となくこのパプア・ニューギニアの大地を踏みしめなければならないだろう。しかし、退却することなく、我々の大いなる目標<sup>ゆめ</sup>をめざして前進していこうではないか。

我々のニューギニア探検は、今始まったばかりなのだ。



Korogo mask